

〈書評と紹介〉 小口雅史編 『海峡と古代蝦夷』

中澤, 寛将 / NAKASAWA, Hiromasa

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

77

(開始ページ / Start Page)

79

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

2012-03-24

小口雅史 編

『海峡と古代蝦夷』

中澤 寛将

と述べている。近年、「学融合」や「交流・交易」をキーワードとした研究視角は増えつつある。特に、文献史料が少ない古代北日本の実像を解明するには、考古学をはじめとする周辺諸科学と連携することが不可欠であり、本書は貴重な成果と言える。

二

本書の構成は、以下のとおりである。

本書の視角と課題〈小口雅史〉

総論 津軽海峡を挟む古代北方世界の实態〈小口雅史〉

第1部 海峡以北の世界と東北北部

オホーツク集団と続縄文集団の交流〈天野哲也・小野裕子〉

古代北海道の民族的な世界と阿倍比羅夫遠征〈瀬川拓郎〉

奥尻島出土のオホーツク式土器をめぐる試論

〈中村和之・竹内 孝〉

続縄文後半期の道央地域の位置について〈小野裕子〉

第2部 海峡以南の世界と北海道

古代北奥・北海道の地域間交流〈齋藤 淳〉

蝦夷社会の須恵器受容と地域性〈宇部則保〉

古代北日本における移住・移民〈八木光則〉

東北北部における沈線文土師器〈伊藤博幸〉

秋田城下における蝦夷と津軽・渡嶋の蝦夷〈熊谷公男〉

むすびにかえて〈小口雅史〉

一

本書は津軽海峡を挟んで対峙する北海道と東北北部の交流の実態を、土器類を中心に再精査した上で、比較検討して具体的に描き直すことを目的とした学術書である。本書は、編者である小口雅史氏が代表を務めた研究プロジェクト『交易と交流の深化と断絶過程からみた、津軽海峡を挟む古代北方世界の实態的研究』（平成二〇～二二年度科学研究費補助金基盤研究（B））の研究成果を、広く学界に問うことを目的として出版されたものである。総論を含む一〇本の論文から構成され、いずれも古代北方史研究の第一線で活躍される研究者による最新の成果を所収したものである。

小口氏は、本書冒頭で「文献史学と考古学研究の協業・融合を、北方世界に即して具体的に実現させることによって、交易と交流の具体層を鮮明に描き出し、その展開過程から、津軽海峡が交易と交流を深化させる役割を果たした時期と、（もしあるのならば）境界として両者を断絶させた時期とを明確に分け、これらを総合して北緯四〇度以北の世界の史的実態を解明すること」を目指す

書評と紹介

七九

本書は、大きく分けて、「第一部 海峡以北の世界と東北北部」と「第二部 海峡以南の世界と北海道」の二部から構成される。前者が北海道やそれ以北の世界で展開した交流、さらには北東北との関係について検討し、後者が北東北とその南側の「日本国」、そして津軽海峡以北の北海道との交流について検討する。全体を通して、土器類を中心としながら地域性を明らかにした上で、地域間の交流・交易の実態を論じる。また、すでに研究が蓄積されている文献史料の再評価も行われている。以下、本書の構成に沿って、各論考について紹介したい。

小口雅史「津軽海峡を挟む古代北方世界の実態」は、本書の総論として、古代北方世界の交流・交易に関する研究上の論点を提示し、各論文の位置付けを行っている。特に、本書では、オホーツク文化がサハリン南部から北海道道東・日本海沿岸へ南下することによって生じた、オホーツク文化集団と続縄文文化集団との相互関係を古代北方世界における異文化接触と交流の始まりと捉え、続縄文時代後期（後北C₂・D式期）以降、おおむね四・五世紀以降が検討対象であることを述べる。当該期は、斉明四〜六年（六五八〜六六〇）の阿倍比羅夫による北方遠征、元慶二年（八七八）に出羽国北部で勃発した元慶の乱といった北方世界の諸集団の動向を伝える文献史料が僅かながら存在し、文献史学と考古学との協業によって北方世界の枠組みを提示することを目指している。

第1部は、海洋資源を利用した漁猟狩猟文化として知られるサハリン南部〜北海道で展開したオホーツク文化、本州の弥生・古

墳時代に北海道で展開した続縄文文化（特に続縄文文化後半期）、本州で展開した古墳文化という三つの異なる文化の接触・交流について検討を行い、文献史学で議論されてきた阿倍比羅夫北征記事の再評価を行う。特に、第一部で論点となるのは、サハリン南部で成立したオホーツク文化集団の南下、それと同時に生じる続縄文文化集団の北東北への進出、さらには各文化相互の接触・交流の実相の解明である。

オホーツク文化と続縄文文化の接触関係について扱った天野哲也・小野裕子「オホーツク集団と続縄文集団の交流」は、北大式土器の成立に関係すると考えられるオホーツク文化前半期の刺突文系土器の施文具について検討する。本論文では、北大式に顕著である管状施文具を用いて刺突文系文様を施したオホーツク式土器はきわめて限られた時期に用いられることから、オホーツク式土器への管状施文具は続縄文文化集団との交流の過程でもたらされた可能性が高いとする。その上で、続縄文文化（後北C₂・D式期）段階にオホーツク集団（十和田式）から刺突文の伝統が伝えられて原初的な北大式が成立し、その一方でオホーツク文化集団は管状文様（竹管文）嗜好の伝統を続縄文文化から受け入れたと推定する。その年代は五世紀前半、場合によっては四世紀後半に遡るといふ。

瀬川拓郎「古代北海道の民族の世界と阿倍比羅夫遠征」では、阿倍比羅夫遠征が古代北海道の民族の世界の転換と、その後のアイヌ集団の環オホーツク海域進出とかかわる出来事であったことを述べる。オホーツク集団は鈴谷期（四世紀）にサハリンから北

海道へ南下を開始した時、続縄文文化後期（後北C₂ - D式期）に続縄文集団も東北北部へ南下を開始するが、その目的を寒冷化ではなく、古墳集団の鉄製品入手にあつたとみる。また、定住しながらネットワークを築き、北海道からの物流を仲介しつつ、みずからも毛皮などの交易品生産を行う「定住型交易」から、季節的に訪れて交易する「滞留型交易」への移行は六世紀に遡る可能性が高く、交易は途絶したのではなく、組織的な形に変容していったと考えている。また、『日本書紀』斉明紀の阿倍比羅夫北征記事を読み直し、肅慎の最前線である「幣賂弁嶋」^{へろべのしま}を奥尻島、「大河」^{しりべしつがわ}を後志利別川に比定している。

中村和之・竹内孝「奥尻島出土のオホーツク式土器をめぐる試論」では、オホーツク集団の日本海岸域の南下を証左するものとして注目されてきた奥尻島出土のオホーツク式土器について、その砂粒成分分析を行っている。それによると、奥尻島出土のオホーツク式土器は同島の縄文土器・続縄文土器・擦文土器の砂粒成分と異なることから、同島出土のオホーツク式土器のなかには島外（おそらく礼文島か）から持ち込まれたものが存在する可能性を指摘する。また、交易形態については、奥尻島のオホーツク文化人は、長期間にわたって定住していたのではなく、春の初めに来て冬の初めに引き上げてしまうといった、季節的な滞在を繰り返している可能性を推測している。

小野裕子「続縄文後半期の道央地域の位置について」は、「後北C₂・D式」土器の型式学的特徴と変遷、地域間比較を行い、道央地域の位置付けについて考察する。それによると、道内の「後北C₂・

D式」土器は、後志を含む道央部の石狩低地帯において型式的に強い類似性が見られることを再確認し、道央部は「後北C₂・D式」土器段階を通じて地方への情報の発信源としての位置を保ち続けたと捉える。また、東北地方への「後北C₂・D式」の分布拡大の動機は、「有用財」である鉄器入手であつたと推定している。とりわけ、東北地方で僅かながら出土する「後北式土器」は、施工方法において微隆起・帯縄文・三角形烈点文のセットが認められることから、烈点文の有無と道東部的な施工規則、鋸歯文を多用する意匠が確認できなければ、東北地方出土の「後北式土器」は道南部を含む道央地域と関わりで捉えられるものと推定している。

第二部「海峡以南の世界と北海道」では、視点を南に移し、古代の北東北と津軽海峡の北に対峙する北海道、南側の出羽・陸奥との交流について検討する。特に、考古資料から地域性を把握し、その上で地域間の相互関係について議論されている。

齋藤淳「古代北奥・北海道の地域間交流」は、北海道で出土する土器器環、北奥で客体的に出土する擦文（系）土器甕について検討し、北東北の地域性や北海道との地域間関係を浮き彫りにし、土器の製作地問題にも踏み込みながら、地域間交流の実態について論じる。北奥出土土器器環の器形・法量等の検討から、北海道出土の土器器環が本州からの搬入品ではなく、北海道在地の用途・嗜好に基づき、北海道で製作された可能性を指摘している。一方、津軽地方を中心に確認されている擦文（系）土器は、北海道ではなく、津軽地方を中心とした在地社会で製作された可能性が高く、

岩木川流域でも北海道からの搬入品は若干量とされる。また、擦文(系)土器のあり方から、北海道との関係を保つ陸奥湾周辺域、出羽側との関係の深い岩木川・米代川流域、陸奥側との関係が深い奥南地域の三大地域圏を抽出し、この地域圏は古代のみならず、縄文時代晩期頃から近世前期に至るまで連続と続くものであったと指摘する。

宇部則保「蝦夷社会の須恵器受容と地域性」は、七〜一〇世紀代に東北地方北部や北海道で確認される須恵器を取り上げ、その受容の実態と地域性について論じる。蝦夷社会における須恵器は、七〜八世紀前半に馬淵川下流域や奥入瀬川下流域の末期古墳や周辺集落に流入するが、奥羽で須恵器生産が本格化する八世紀中葉以降には馬淵川流域・津軽平野・石狩低地帯に須恵器が供給され、蝦夷社会の日本海側で須恵器窯(十二林窯、五所川原窯)が成立する九世紀末になると生産地周辺を中心に須恵器が流通する。特に、七世紀代に馬淵川下流域で認められる湖西産須恵器は、内陸経路ではなく海路で供給されたと推定している。また、須恵器の受容には、岩手県北部から青森県南東部の馬淵川流域、青森県西部の津軽平野、北海道の石狩低地帯で地域差があることも指摘されている。

八木光則「古代北日本における移住・移民」は、オホーツク文化や縄文文化の南下、九世紀の津軽地域の集落数増加など、北日本における人的交流を理解する上で論点となる、移住(他の土地へ移り生業や家庭生活を営む長期の居住)、移民(国家主導又は組織的な他国への長期居住を目的とした移住)の実態について検

討し、土器・住居・集落等に見られる外来系要素の程度から、移住者や移民主体の集落と在地住民主体の集落を区分している。特に、縄文文化の南下については、東北北部において後北C・D式期(四世紀)土器が主体的な土器とならないことに留意した上で、北海道と東北北部では「縄文文化」土器に地域差が認められること、堅穴住居の衰退が漸移的な変化としてとらえられること、墳墓も異なる推移を示し、土器組成や石器組成、鉄器普及の状況も異なることから、北海道からの大規模な移住によって東北北部社会が大きく変容したとは考えられないとする。続く五世紀後半に出現する青森県八戸市田向冷水遺跡の集落では在地的要素が少なく、非在地系でほとんどが占められることが指摘され、胆沢地方からの移住によって成立したと想定している。また、これまで出羽方面からの大量移住の可能性が考えられてきた九世紀後半以降の津軽平野での集落数・堅穴住居数の増加については、在地的要素がほとんどであることから、地域内での人口増加によるものと捉え、南の地域から津軽への人の移動があったにせよ、津軽の人口を大きく増加させる要因にはならなかったと指摘する。

伊藤博幸「東北北部における沈線文土師器」は、東北北部に分布する沈線文土師器を集成し、施文方法と出土遺跡の時期的・空間的偏差について検討する。従来、沈線文土師器は北海道の北大式土器の影響を受けて成立したと考えられていたが、「北大Ⅱ・Ⅲ式」土器との関係を否定し、「北大Ⅰ式」の後裔によって作られた可能性が高いという説(小野裕子氏)、東北北部地域で独自に展開したという説(宇部則保氏)等が提示され、沈線文土師器の系譜

関係や成立過程について議論されてきた。伊藤氏は、東北出土の沈線文土師器が七世紀前半から八世紀後半まで認められ、七世紀後半にピークを迎えること、その分布が北東北を主体とすることを確認した上で、口縁部や頸部に沈線鋸歯文・山形文を施したⅡ類土器は岩手県北部から青森県東部付近で成立した可能性が高く、直接的に北海道の土器文化の影響を受けて成立・展開したわけではないと指摘している。

熊谷公男「秋田城下の蝦夷と津軽・渡嶋の蝦夷」は、元慶二年（八七八）三月に出羽国北部で勃発した「元慶の乱」について、基本史料である『日本三代実録』元慶の乱関係記事を再検討し、蝦夷諸集団とその相互関係について論じる。特に、元慶の乱に関わった津軽蝦夷・渡嶋蝦夷について、反乱軍側に加わった津軽蝦夷は米代川流域の蝦夷集団との交流が密接であり、一方、政府軍へ助勢を申し出るが、戦闘に参加しなかった一部の海岸部の津軽蝦夷は渡嶋蝦夷と比較的緊密な関係を持っていたと推測する。また、従来、津軽を指すと理解されてきた「奥地」については、この用語が津軽に限定できるものではなく、秋田城を基点とした相対的な区分とし、秋田城から比較的遠い地域（米代川中・上流域か）と津軽方面を包括した表現と捉えている。

三

本書は、古代北方史研究の論点となっている諸問題について、津軽海峡を挟んだ北東北と北海道の遺跡出土の考古資料を素材として、交流・交易の観点から古代北方世界の社会動態について論じ、

既往の文献史料の再検討を試みているという点で、古代北方史研究を一步前進させたものとして評価できる。以下、本書の評価点を簡単に記しておきたい。

第一に、北東北と北海道の地域性を明らかにした点である。この背景には、発掘調査の進展に伴う資料蓄積があるの言うまでもない。考古資料の分析から河川流域・平野を単位とした小地域での地域差を把握できるようになり、地域間の相互関係や移住・移民、交流ルート等について議論している。特に、齋藤論文では土師器・捺文（系）土器から北海道との関係を保つ陸奥湾周辺域、出羽側との関係の深い岩木川・米代川流域、陸奥側との関係が深い県南地域の三大地域圏を抽出した。また宇部論文では須恵器受容のあり方から岩手県北部・青森県南東部の馬淵川流域、青森県西部の津軽平野、北海道の石狩低地帯の地域差を明らかにしている。この地域差が、熊谷論文で指摘されている津軽蝦夷の地域差とどのように関わるのか、今後、文献史料と考古資料の摺合せ作業が課題となるだろう。

第二として、従来、外来系土器や外来系技術・技法と理解されてきたものについても、より具体的な接触関係や系統関係が明らかにされた点である。たとえば、天野・小野論文では施文方法から統縄文土器とオホーツク土器の接触関係、小野論文では「後北C₂・D式」土器段階を通じて道央部が地方への情報の発信源であった点、齋藤論文では北海道のロクロ土師器環と北奥の捺文（系）土器が在地製作された可能性、八木論文では移住・移民の実態について論じられている。

第三として、考古資料の分析から、僅かに残る阿倍比羅夫北征記事や元慶の乱関係記事の評価について、考古学との協業・融合によって摺合せが可能になってきた点である。前述の津軽蝦夷の地域差のみならず、オホーツク文化の南下の実態についても、瀬川論文や中村論文に見られるように、考古学・理化学分析から議論できるようなった意義は大きい。

四

次に、若干課題について述べる。

第一として、本書のテーマが土器類の精査に主眼が置かれていることにもよるが、土器以外の様相についての検討が課題として挙げられる。八木論文や齋藤論文では、北東北の集落遺跡で認められる北海道起源の外來系要素が統縄文土器や擦文(系)土器以外では希薄であることが指摘されている。交流・交易の実態をより深く理解するには、土器以外についても検討したうえで人的交流の実態を把握するとともに、生活様式や文化変容の意義についても議論する必要がある。ただし、齋藤論文に見られる法量・胎土分析の精緻な分析、宇部論文に見られる須恵器の受容(器種構成・出土状況・使用法の検討)の実態、八木論文に見られる集落構造や出土遺物に見られる外來系要素の実証的な検討は、生活様式や文化様式の理解にもつながる。今後、さらなる成果が期待される。

第二として、小口氏も指摘するように、秋田城跡の北方支配の実態解明である。宇部論文では、九世紀末に津軽で成立する五所川原窯は、官窯から民窯への転換が図られる全国的な窯業生産の

動向と連動し、五所川原窯周辺には律令側が関与しやすい社会状況があったと想定している。五所川原窯開窯にあたって、秋田城がどの程度関与したのか／しなかったのかを明らかにすることも、今後の課題である。また、一〇世紀中葉以降に北東北・北海道南部で展開する「防御性集落(環濠集落・囲郭集落)」や交易拠点とも理解されてきた十三湖沿岸の再評価も必要となる。一九九〇年代以降に古代城郭と推定されてきた青森県五所川原市福島城跡では、近年の発掘調査で、一四世紀後半～一五世紀前半に「外郭」・「内郭」が整備・展開することが判明している(青森県教育委員会「福島城跡」二〇一二年)。古代の十三湖沿岸の見直しも必要になると思われる。さらに、同時期に大陸で勢力を持った渤海(六九八～九二六年)との交流についても視野に入れる必要がある。渤海使は出羽にもたびたび訪れ、秋田城跡では渤海系とされる鉄製羽釜が出土している。これまで、大陸系あるいは渤海系と評価されてきた資料についても改めて検討し、文物の交流の実態についても明らかにする必要があるだろう。

五

以上、僭越を顧みず私見を述べた。近年の古代北方史研究では、本書に代表されるように、考古資料の蓄積によって精緻な分析が可能となり、古代北方世界の交易・交流の実像が判明しつつある。特に、北方史研究は、「日本史」研究に対する反省として、より豊かな日本列島の歴史を描くうえで重要な位置を占める。また、北東北・北海道は、その地理的特性から渤海や靺鞨・女真等の大陸

との交渉も盛んに行われ、環日本海、さらには北東アジアの社会動態を理解する上でも重要な地域である。

この点でも本書は、古代の日本列島内の多様な地域文化の実態を理解する上でも貴重な成果と言える。既刊の榎森進・小口雅史・澤登寛聡（編）『アイヌ文化の成立と変容―交易と交流を中心として―』（岩田書院、二〇〇八年）、小口雅史（編）『古代末期・日本の境界』（森話社、二〇一〇年）と併せて一読すると、より一層理解が深まるものと思われる。

前述したように、小口氏は、現在、新たな研究プロジェクトとして、『律令国家の北限支配からみた、津軽海峡を挟む古代北方世界の実態的研究』（平成二三年度～二六年度科学研究費補助金基盤研究（B））を推進している。律令国家最北の支配拠点である秋田城の北方支配や北方世界との交流の実態について解明することを目指したものである。このプロジェクトは、本書の課題とされた秋田城を軸に据えたものであり、さらなる研究成果が得られるものと期待される。

なお、内容紹介において誤解があつた場合には、筆者の乏しい能力ゆえである。ご容赦願いたい。

（二〇二一年一〇月二五日刊 高志書院 A5判 二九九頁 定価六〇〇〇円）